

合宿保育

一学期も終了という翌日は、毎年、年長組の合宿保育が計画されている。卒業生が「一番楽しかった」と話すので、「是非してほしい」といわれるが、先生方の心身共に疲れ果てるように何度も何度もかためられもあつたものだ。「子どもたちがそんなに喜んでくれるのなら……」という先生方の気持ちのいい申し出と「私たちができることなら何でもしますから……」というお母様方の応援を得て、今年もまた続けられ、前年の記録と反省をたよりに、よりよい方向づけをしながら、七月二十日を迎える運びとなった。

午前中の涼しい時にお母様方が大掃除に来て下さる。保育室の机、いす、その他の備品はすべて幅三メートルのベランダへ出され、清掃後の保育室は幼児の手の届く所はすべて消毒し、虫よけにバルサンがたかれる。やがて部屋に貸ぶとんが届く。これまた気持ちのいいほどま新しく衛生処

渡辺 靖子



理されているのだが、これで五十%余の大寝室が設定完了となる訳だ。また階下年中組の保育室は食堂と早変わりし、お母様方が引上げられるころは、先生方に、仮眠をとり夜に供えてほしいのだが、あらかじめ提出された園児の家庭調書の一覧表を繰返し眺めながら、一人一人を想定し思いにふけることが多い。楽しい思い出のために家庭的なふんい気で迎えたらか、友だちと心のつながりができるのである。また親を離れて泊ることから成長の喜びと共に自信ができるのでは……と、思いは尽きない。

やがて期待と焦燥と不安の交錯する中で、努めてにこやかに園児を迎える訳だが、折しも夕立の後とて涼風の立つ午後六時を前後して、三々五々母親と登園して来た。湯上がりのこざっぱりした顔に夕日ははえて「せんせい、おはようございます」「あつ、こんにちわ」「こんばんわ」、

いろいろなあいさつが笑いの渦の中に消える。一週間前から
の導入で保育室が寝室になることへの関心も深く、「こちら
が玄関なの。さあ、どうぞ」という担任の声に喚声が上が
り、ベランダ入口に並べたママゴト用の座敷際で上ばき
を脱いで入室。お弁当（夕食用）と歯みがきの入ったかば
んはベランダ側のかばん掛けに、パジャマ入れの絵本袋は
ロッカーに入れて、壁面にはられた日程表をうれしそうに
見ている友だちと話している。シートとタオルケットをかご
に納め「○○ちゃん。じゃがんばってネ」と帰って行く母親
の声はもうその耳に届かない。何もない保育室の解放感に、
走り廻るのでは？との予期に反して車座になり、おしゃ
べりは続く。積み上げられたふとんがそうさせるのか。や
がて全員そろうところは日没も近く、手に手に通園かばんを
持ち階下の食堂で夕食となった。夜半に空腹で眼覚めては
かわいそうなので、家庭と同じ時間に夕食を、と試みたこ
とだったが、大好きなお弁当からスタートする合宿は快調
のようである。食事申話題の人気をさらった花火大会は七
時すぎから始められた。

まず、食事終了のクラスからバケツを囲んでめいめい花
火を楽しんでいたのだが、折あしく雨が降り出したため、
急ぎよ予定を変更し、担任と二階のベランダから花火見物

となった。家庭ではできない中国製のさまざまな花火が飛
来する度に喚声が上がリ、拍手がわく。この日ばかりはお
兄さん先生（主事）の大活躍、おじちゃん二人の名演出
は物の見事に園児を魅了してしまった。プールの水面には
える花火もまた一興だったが、気が付くと団地の窓々に顔
顔、顔。園庭のさく暗やみにも重なる人影。いつの間
にこの花火も団地の名物になったようだ。充分楽しんだ後
は、階上のゆうぎ室に雨上りの涼風をいっぱいに入れ、映
画を見る。

ベランダは消燈せずホールの中だけ消燈していたのだが、
突然泣き出した子を担任が連れて来た。話を聞くとどうし
ても帰るといっているので家庭に連絡をとると「無理だったん
です。昨日まで熱があつて寝てたので止めたんですけど」と
お母さん。そこで明朝の散歩に途中から参加して朝食を一
緒にすることに話し、送り出した。予測はしていても驚か
される。そうこうする中に保育室は年中・少の先生方で床
が敷かれ、寝室は就寝を待つばかりとなり、担任と歯みが
き、トイレを済ませて来た子どもたちを迎える。枕元へ持
つて来た絵本袋からパジャマを出し、担任の説明でいっせ
いに着替えるのだがそのにぎやかなこと、仲よしの友だち
と寝る楽しさははかりしれないものようだ。着衣が絵本

袋に入れられ片付くころが九時、消燈だが、各組から就寝終了の知らせが職員室に届くころには放送準備もOK。静かに闇をぬって童話の朗読が流れ、やがて「おやすみなさい」、後はポリウムを落としてレコードが早くお眠りとなさやくように一しきり続く。今年は夜半雨になり涼しさも手伝ってか、比較的心地よく眠りに入ったようだ。

団地の窓明りがほとんど消えるころ「先生、お願いします」と担任が泣きじやくる女児を抱いて来る。泣き方から寝ぼけたようすなので受け取りながら眼覚めを待つて「幼稚園にお泊りしたのね。ずいぶんお姉ちゃんになったわね。わかる？ W先生、A先生も一しよ」と、その中にフト大きな眼を開けたかと思うとすーっと寝息を立てて、そのようすの何とかわいいこと。二人で顔を見合わせ、笑いをこらえて保育室へ抱いて行った。五クラスもあると各組に一人は手のかかる子はいるようだが、落着いて処置している先生方のようすは実にたのもしい。今年は職員控室に引き取った子は発熱と鼻血の二名だったが、どちらも家庭でなれていることなので泣きもせず、冷やしてもらい、翌朝迎えが見えるまで熟睡していた。

朝の眼覚めは各組各様でまたおもしろい。一応六時起床とはなっているが、その差は約四十分ほどで、着替え、洗

面の済んだ組から散歩に出かける。すがすがしい朝の空気を胸いっぱい吸い込んで、明けやらぬ団地の窓々を見上げ、早起きの優越感に浸るのもまた格別といったおももちで帰って来る。園庭でハトポップ体操を、またちよつと気取ってラジオ体操をしたり、七時の朝食に間に合うように入室する。朝食は自宅も近いことなのでごく軽く牛乳、クラッカー、チーズ、プディングとしたところ、大変受けていたようだ。

食後は、寝室変じての保育室で、担任を囲んで楽しいおしゃべり。その中でほめられて満足そうな顔が並ぶ。中でも母親が特に心配していたK君の、ひときわ生き生きとうれしそうな顔が印象的だった。やっぱり行事に取り上げてもよかったのだとみんなの顔が教えてくれている。八時に母親に迎えられ降園して行く後姿に、無事故の喜びと共に、教師ならではの満足感がそれぞれの胸に迫るのだった。

終わってみて今年の感激は、何といっても卒業して行ったPTA前会長が、役員を伴い、先生方のお夜食に、と手作りのお料理を、それも雨の中を届けて下さったことだ。ご主人運転の車を夜半の玄関で見送りながら、過ぎこし方のPTAを思い出しながら、「誠意」「誠意が」とつぶやいていた。

(上尾ひなぎく幼稚園)